



ふるさかはるか

Haruka Furusaka Solo Exhibition

ことづての声 / ソマの舟

The Voice of Lore / Soma's Boat

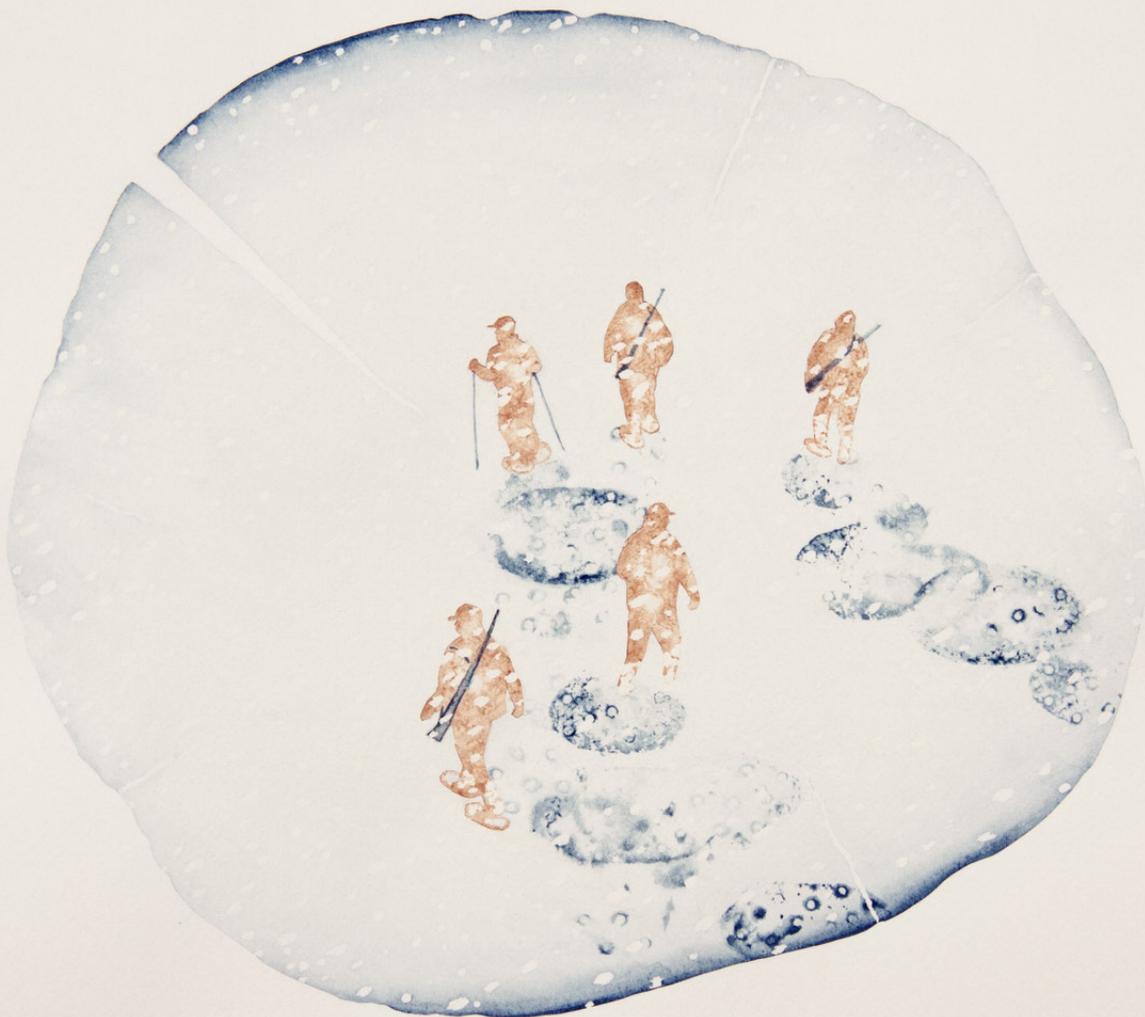
2023年11月4日[土]～11月25日[土] 13時から19時まで

水・木休廊 / 入場無料

*11月23日[木・祝]は開廊 *11月18日[土]は関連イベント開催につき18時まで

協力:信陽堂

ギャラリー・パルク



《巻き狩り》

2023

藍、土、紙 / 水彩

38.0 × 44.5cm

Gallery PARC [グランマールブル ギャラリー・パルク]では、2023年11月4日から25日まで、木版画家・ふるさかはるかの個展「ことづての声 / ソマの舟」を開催いたします。

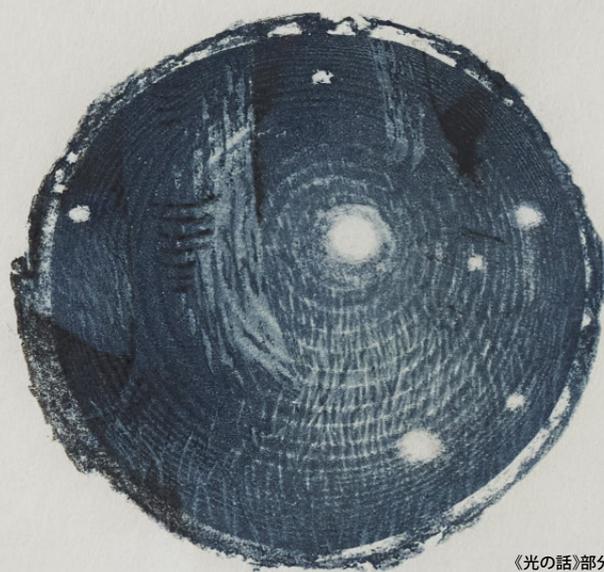
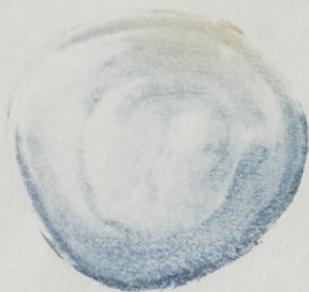
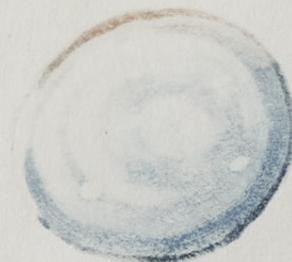
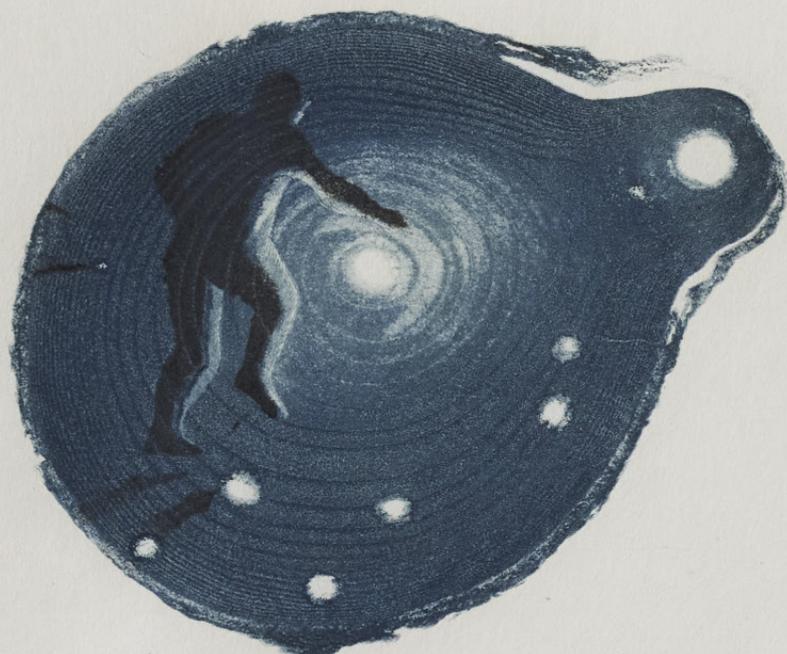
ふるさかは1999年武蔵野美術大学油絵学科卒業後、2002年よりフィンランド、ノルウェーなどでのレジデンス・発表をはじめ、様々な土地を訪れるなかでその地の暮らしや風土を知り、そこを端緒に木版画を制作しています。木や土など、その土地の自然素材を得て制作するふるさかの木版画は、そのプロセスにおいて素材から自然や暮らしを「汲み取る」行為であるといえ、「自然と共に生きる人びとのことばや手仕事」を眼差し、自身の手仕事(版画制作)や他者の手仕事を通じて「人が自然から何を読み取り、協調しているのか」について知り・確かめる行為として、取材から木版画制作の一連に取り組んでいます。

2017年よりふるさかは、津軽・南部地方で山の人びととその手仕事を取材し、何気ないことばを聞き取りながら、彼らの「山の命との向き合い方」に眼差しを向けてきました。ふるさかは彼らが自然とどのように向き合い、そこから何を読み取り、それが手仕事にどのように表れ、人と自然の関係性への洞察がことばにどのように表れているのかについて、彼らのことばと手仕事を自らの手で理解しようと、土を拾い藍を育てて絵具を作り、木片の形に導かれながら自然の色・形・摂理と呼応するように版木を彫り、作品をつくってきました。

その成果の一部は2022年に開催したギャラリー・パルクでの個展「積層の器 ことづての声」において発表されましたが、そこからさらなる取材や制作を経て、2023年11月に作品集『ことづての声 / ソマの舟』として出版されることとなり、本展はこの出版に合わせて、作品集に所収された木版画やドローイングの原画作品をはじめ、取材先で撮影したピンホールカメラによる写真作品や資料などを展示するとともに、完成した書籍をご覧いただけます。

本展「ことづての声 / ソマの舟」は、「自然と人間との関わり」を考える上で、そこに暮らす人々の「ことば・手仕事」をその接点として眼差ししたふるさかが、自らも「ことばを紡ぎ・手を動かす」ことでそこに理解を超えた「共感」を得て制作した作品と書籍によって構成されます。鑑賞者はふるさかが触れてきたことばや手仕事だけでなく、ふるさか自身のことばや手仕事に触れる中で、ここに新たな「共感」を体験いただけるのではないのでしょうか。

なお会期中の11月18日には「座談会」として、作品集の編集者・丹治史彦さん(信陽堂)をお迎えし、作品集の制作や取材にまつわるお話を伺います。また作品集『ことづての声 / ソマの舟』は本展会場だけでなく、ギャラリー・パルクのオンラインストアからも購入いただけます。



《光の話》部分

2023

藍、土、漆、紙 / 木版

39.2 × 56.5cm

南津軽で始まった山の手仕事の取材が、6年の歳月を経て本になった。

山の命と直接関わるマタギ(猟師)やソマ(木こり)や漆掻き(樹液を採集する人)は、冬の厳しい北国で動植物からどんなサインを読み取り、どう自然とやりとりするのか。

山のことばに導かれ、取材地をたずね歩いて記録した。

そうたずね歩くうち、藍と漆とヒバと土とが私の手元に託された。

山のことばと素材に呼応し、私も彼らの手振りをまねび木版画を作りたい。

ヒバの香を嗅ぎ、藍の葉が青に変わるのを見、漆にかぶれるのを肌で覚えながら、

山の命と関わる手段を引き寄せるために。

《宵山登山》
2022
藍、土、漆 / 水彩
23.0 × 15.7cm

出展作家 ふるさかはるか

展覧会名 ことづての声 / ソマの舟

会 期 2023年11月4日[土]～25日[土] 13時から19時まで *11月18日[土]は18時まで
水・木休廊 / 入場無料 *11月23日[木・祝]は開廊

協 力 信陽堂

関連企画 【座談会】

11月18日[土] 18時～20時 参加費1000円 定員25名(予約優先)

作品集『ことづての声 / ソマの舟』の編集者・丹治史彦さん(信陽堂編集室)をお迎えし、作品集の制作にまつわるお話から、取材地の山の手仕事についてお話します。
マタギ業「鳥っこ止まらず」のお茶を飲みながら、山の命と直接関わる人びとのことばに触れてみましょう。

※予約・詳細はギャラリー・パルクWebサイト(www.galleryparc.com)にて

会場・主催・お問い合わせ

ギャラリー・パルク

602-8242 京都府京都市上京区皂莢町 287 堀川新文化ビルディング 2 階 075-334-5085 / info@galleryparc.com / www.galleryparc.com

[アクセス]○地下鉄烏丸線「丸太町」・「今出川」駅より徒歩約20分 ○地下鉄東西線「二条城前」駅より徒歩約18分 ○京都市バス9番・50番(JR京都駅から約22分)・12番(阪急烏丸駅から約15分)・67番(阪急大宮駅から約12分)系統「堀川中立売」バス停下車徒歩1分 ○駐輪場・駐車場 有 ※満車の場合は近隣のコインパーキングをご利用ください。



ふるさかはるか（木版画家）

土と藍から自作した絵具と、版木の持つ自然な色・形に着目した木版画を作る。ノルウェーなど北国での滞在制作・発表のかたわら各地の山の手仕事を訪ね、近年では自然と共に生きる人びとのことばや手仕事をテーマにした作品に取り組んでいる。展覧会『トナカイ山のドゥオッジ』では、北欧の先住民民族サーミの人びとを取材した木版画シリーズを発表。2017年国際芸術センター青森での展覧会『土のことづて』を機に青森での取材を重ねてきた。2010年「木版画アトリエ空中山荘」を立ち上げ、美術館等でのワークショップを通して手仕事と絵画の要素をあわせ持つ木版画の魅力伝える取り組みも行っている。



作品集『ことづての声／ソマの舟』

ふるさかはるか著

発行:空中山荘 発売:信陽堂

600部限定・224ページ・定価6,050円(税込)

発行日 2023年11月3日

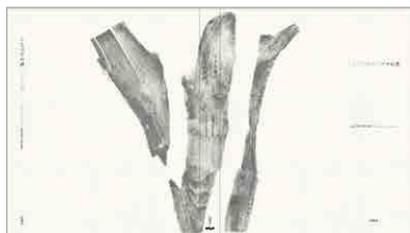
山の命と直接関わる手仕事の人びとが動植物からどんなサインを読み取り協調しているかを取材した作品集。南津軽の山で出会ったマタギ(猟師)の暮らしやソマ(木こり)の漆塗りの笛の話をつきかけに、南部地方の漆掻き職人とその道具を作る鍛冶屋まで訪ね歩いたインタビューを掲載。

「ことづての声」には取材したインタビューとピンホール写真、ドローイング、「ソマの舟」にはインタビューをもとに執筆したエッセイと木版画を収め、木版画と山仕事という自然と関わる手仕事だけでなく、記録と考察もが呼応する構成。

管啓次郎氏(詩人／比較文学者)、登久希子氏(人類学研究者)による寄稿文も収録。

取材地の漆の木と樹液を使って手刷りした「漆木版画」、ソマの漆塗りの笛の音声を聴けるしおりが添えられています。

本の中で交わされる山のことばと自然の色・形から、人が手を通して自然と関わり続けるすべを読み取っていただけたら幸いです。



購入はギャラリー・パルク オンラインストアより

[parcstore.com]